

横浜市小学校社会科研究会

5 学年部会

研修会記録

第 3 号

令和6年 8月1日
横浜市小学校教育研究会
会長 沼田 留美子
横浜市小学校社会科研究会
会長 高島 聡
同 学年部長 田澤 哲哉

【提案日時】

8月 1日 (木)

【会 場】

フォーラム南太田

提案 遠藤 恭兵 先生 (白幡小)

司会 菅原 大樹 先生 (上末吉小)

記録 佐藤 安世 先生 (北綱島小)

1 提案内容

単元名「幻のなしの生産を追って」

～Yさん (白井市) の「幸水」づくりから考える日本の果物生産～

2 提案者より

- ・梨の生産量は、都道府県別で千葉、茨城県が多く、千葉県内では白井市と市川市の順に生産量が多い。そのため、「しろいの梨」は日本一の収穫量を誇る。

視点①について

- ・教材化のための学習指導要領の分析を通して、イの(イ)食料生産に関わる人々の工夫や努力は、子ども自身で調べることが難しいと考え、先に予想を立てて、そこから調べる視点を明確にして学習を進めるようにした。
- ・3年生の生産単元との違いでは、①食糧自給率について(輸入と輸出)②食料自給率についての課題(食料自給率:低)③農業の課題(少子高齢化)④持続可能性(ブランド維持・専業継続)に触れていく必要があると分析した。また「日本」「全国」そして「生産」に目を向けるために、白井市役所の取組から単元終末で「後継者不足」「環境問題」の視点に着目できるよう単元構想をした。
- ・視点①の手立てとして、前単元「米づくりのさかんな地域」との関連、「夢の献立メニューづくり」という導入の工夫、「浜梨(横浜市)としろいの梨(白井市)」との比較でより自分事になっていけるよう単元展開をした。
- ・米の学習で取り上げにくかった「輸送面」「品質保持」の視点を単元の前半で出していけるように工夫した。

視点②について

- ・視点②の手立てとして、間引き作業に注目して問題の焦点化をしていけるよう資料を工夫した。また全体を通して総合的な学習の時間との関連を図れるようにした。また振り返り(学び方)の価値付けと振り返り(学習内容)の共有は、C29児の支援にとっても必要と考え、単元の途中で組み込むようにした。
- ・市川市の小学校副教材「梨づくりごよみ」の5月～7月に記載されている「てきか」は、摘蕾、摘花、摘果で3回あることや、「てきか」がイメージできるようイラスト提示する中で、C7児が「てきか」はいらないと言い出したことで意見が分かれたため、第8時の話し合いをした。本時では、さらに生産者と消費者(+後継ぎ)で話したことで、C29児の視点が広がったことが振り返りからみとることができた。

3 協議会

視点①について

- ・梨に焦点化させていく段階的な手立てが、子どもたちに自然なものになっていた。米づくりの学習と比較した学習がよかった。学習形式の選択が6月の時点ですごい。子どもたちにもその必要感があり、教師の提示した学習問題も毎時間、明確だったからできたのではないか。
- ・導入の工夫で、果物に対する意識を引き付けていたのが印象的。米での学習経験が学習計画を立てるところや子どもたちの学習形態の選択につながっていた。人とのつながりがいい。YさんやJAとのかかわりによって、持続可能は難しいという課題をより意識できていた。フードロスがある一方で、品質を高めていることのギャップをもう少し子どもたち同士で話し合ってみてもよかった。それが総合にも発展していけるのではないか。
- ・米作り学習に似ていたことで、子どもたちも学習しやすかった。そこでおさえきれていなかったという輸送面、新鮮さをプラスで学習できたのがよかった。浜なしから入ったことで、子どもたちには身近だった。子どもたちが学習形態を選択することで、教師のみとりが追いついているのなら、そこがすごい。子どもたちが「てきか」を摘蕾、摘花、摘果それぞれに捉えていたズレを共有させ、学習問題にした流れがよい。話に出たデジタル図書

館の中身についてもう少し知りたい。

- 先生が取材の際に食べた梨について、実際に糖度をはかってみるなど数値化した資料があったら、生産者の工夫がより分かったのではないか。
- デジタル図書館を活用したグループワークは、近くの児童同士のグループではなく、同じめあてをもつ児童同士の方が、主体的に学び続けることや個別最適な学びの支援になったのではないか。第8時では、児童主体で板書をしながら「摘果は必要か、必要ではないか」を話し合ったのであれば、本時は必要であったのか。
- Yさんの思い、必死さに迫っていくことで、より自分事になれるのではないか。
- 米作りとの比較で学習できたことは視点が明確になっていてよかった。単元の導入での「夢の献立づくり」は、バランスなのか高級感なのかがあいまいになってしまう。生産量の比較、三浦市のスイカ、鶴見川流域の桃などと比較して産地を予想し、千葉県が一位というズレで入っていくことも考えられる。

視点②について

- 第8時と本時の流れは、「てきか」は実際に行っているものなので、話し合いが必要であったか。
- 本時での教師の発言「Yさんに達成感があるってことね。」を子どもの言葉で引き出すためにはどのような手立て（資料等）があるとよかったのか。
- 本時の学習問題は、子どもたちのこれまでの学習経験（生活科でのアサガオ、野菜づくりに必要な間引き作業）がある中で、適切なものか。Yさんの梨への思い、こだわりを取り上げていったらよかったのではないか。本時から単元終末の問題はすぐに結びつかないが、どのようにつなげたのか。
- 話し合いに生かされる資料、根拠になる資料（「てきか」した梨としない梨の甘さの違い、ブランドを保つための収入面での違いを数値化したものなど）があるとよかった。
- 本時は、Yさんの葛藤、ジレンマからの子どもの問い、そこから工夫や努力が見える資料があるとよかった。
- 先生が目指していた「おいしい梨をつくることで後継者問題の解決にもつながる」という振り返りにつながるまでに3時間かかっている。Yさんしか「てきか」していない、Yさんだけが3回している、浜梨はやっていないが白井の梨はやっているなど、なんでそこまでしてという「こだわり」が見える事実があればよかった。
- 「てきか」は、米作りはしていないので比較は難しい。そこに注目すると理科になってしまう。フードロスや品質の低い梨の扱い、梨を広めていくためになど、Yさんが困っていることを取り上げられるとよい。

<講師の先生より> 加藤 智敏先生

- 子どもの追究意欲をかき立てる「日本一」の言葉を「単元を見通す学習問題」の言葉へ入れるとよい。
- 3年生、4年生での積み重ねという「縦のつながり」と5年生の学習内容の「横のつながり」が大切になる。特色ある地形、特色ある気候のくらし、米作り、そして本教材の梨は、「育てている」が重なっているため、どこを焦点化するのがポイントになる。着目する点を地形や気候のところは自然条件、米作りは手間や工夫、そして今回の梨の場合であれば、育てたものの後ろにどんな市場があるのか、生産者がどう儲けを出しているのか、ポイントを変えて生産を学習していくと「社会条件」にも目が向けられるようになり工業の学習にもつながっていく。5年生は「自然条件」と「社会条件」をかみ合わせていくことで、見方・考え方を働かせる、資質・能力が育っていく。
- クラス全員を育てていくためには、「体験」が必要。梨を触ったり食べたりすること、「てきか」の判断を実物で見せ、そのジレンマを感じていけるようにすると、協働的な学びになる。

<講師の先生より> 松本 進先生

- 「夢の献立」づくりの導入から梨に焦点化していけるように想定した手立て、子どもたちが既習内容と比較・関連させやすいような学習履歴がよい。
- 既習でおさえきれなかった視点の資料提示、既習を生かした見方・考え方を鍛えるような展開がよい。
- 第3時後のC児の振り返りから、ロイロノート資料箱に資料をC児が分かる用意するなど、子どもの評価をして次の指導につなげているところがよい。
- 子どもが多様な学習形態を経験して選べることは理想だが、そこには学習のねらいも含めた判断が必要。
- 「梨が傷つかないように厳重に〜」「協力して選別」など、子どもの発言、捉えた言葉の背景が、どれだけ具体的に人の営みと結びついているのか。動画でこの部分が〜と見返す、確かめたいことをさらに観るなども大切。
- 白井市役所に問い合わせたところ「てきか」は、農家にとっては当たり前。「てきか」をしないということは、収穫をゼロにすることに等しいこと。現在は、気候変動に対する判断、対策が難しい。梨は気候と向き合っていないかなければいけないので、そこもズレになる一例。また梨農家にとって土づくりが人によって違うとのこと。農家が判断するときにジレンマのところや、子どもが思っていることとのずれを感じることで、これまでの学習なども含めて教師が学習問題にしていけるところを選んでいく。
- 持続可能な農業の学習は、全国の事例地での取組を補完し合って行っていくとよい。